

## 13 「はじまりの物語」

### ～セルフヘルプグループから「私たち」へのメッセージ～

#### ○開催目的

マイノリティ（社会的少数者）の方々を巡る社会状況は大きく変わりつつあります。例えば、LGBT等性的少数者の方々に関して、レインボーパレードなどの社会的な注目や渋谷区での条例づくりなども進んでいます。しかし、このボランタリーフォーラム実行委員会のなかで、「自分の周りでは『認知されている』という実感はあまりない。まだまだ当事者の生活者としての肉声が、日々の暮らしのなかで聞こえてこない・語られていないからではないか？」という声が聞かれました。

東京ボランティア・市民活動センターに寄せられる相談の中身をみると、「セルフヘルプグループ」もさまざまに多様化の動きをみせており、その存在をアピールするようになってきています。それだけに、「セルフヘルプ」を文字通り「自助」と捉えるだけでなく、「生きにくさ」を生み出す社会的な背景を社会全体で広く考える必要があるのではと実感します。

「人ごとじゃない」。その意味で「当事者性」の質を問い直し、共有・共感する「市民社会」のありようを、市民一人ひとりが考える必要があるのではないかと感じました。

#### この分科会での「狙い」……「市民」としての「暮らしの共感」を育む

例えば、上記であげたように、LGBT等性的少数者の方々に関してみると、当事者運動としての広がりもみられます。また不十分とはいえ、条例化というかたちで制度・施策のサポートも少しずつ進み始めています。それにも関わらず「自分の周りでは『認知されている』という実感はあまりない」という声が、なぜ出てくるのでしょうか。担当者の話し合いのなかでは、NPO活動として当事者運動に熱心に関わる方から「日頃、職場では『着ぐるみを着た感覚』で自分を押し込めている」という言葉を打ち明けられた、という話も出てきました。身近な地域生活・日常生活においてはさまざまなコンフリクト（摩擦・あつれき）がまだまだ数多く存在するのではないのでしょうか。

この分科会では、出演者が、それぞれの活動内容というよりは、「身近な暮らし」の中から、グループが「必要だ」、活動を「はじめたい」と思った原点を語ることで、「市民」としての「共感」を育むことを目標としました。そのために、まずはこの分科会が、互いの価値観や考えの「違い」を認め合う市民社会について考えるきっかけとなればと考えます。

#### 想定した参加者

多様な当事者団体・個人（ベテランもこれから取り組みを始めようという方も）に参加していただきたいと考えました。「はじまりの物語」をキーワードにすることで、テーマごとの違いに着目するのではなく、「共有できる何か」を探ることができるよう工夫

しました。なぜ活動を始めようと思ったのか、その「原点」に注目する中で、活動内容ではなく、おのずと日常生活でのエピソードに繋がるはずだと考えました。

かつ、いわゆる「当事者運動」に直接関わっているわけではない「関心ある市民」にも広く参加していただきたいと考えました。どうしたら「市民社会へのメッセージ」として広く発信できるか、「共感できるメッセージ」を一緒に創るところから参加していただきたいと考えました。

### 分科会「成果物」のイメージ

- 1 「違い」に着目して細分化したり、時には対立すら生じることもあるセルフヘルプグループ・当事者運動が、互いを知り繋がり合うことで、今後も広く支えあえる関係性を生み出せるよう、そのきっかけの場となればよいと考えました。
- 2 「共感できるメッセージ」も一つにまとめるわけではなく、参加者一人ひとりにとっての「日々の暮らしのなかでの共感」として、参加者自身に持ち帰って欲しいと考えました。

### ○開催日時

2月13日（土）14：30～17：00

### ○参加者数・出演者・団体

参加者数：39名（参加者29名、出演者5名、スタッフ5名）

出演者・団体：

- ◆自身の体験から、自死遺族への差別偏見のない社会をめざす団体を立ち上げ、活動：田口まゆさん（NPO法人 Serenity 代表）
- ◆同性パートナーの看取りをした体験を経て、現在はLGBTの認知と理解をテーマに活動：けんたろうさん
- ◆性的強迫症からの回復をめざすセルフヘルプグループ、SCA東京グループのメンバー：タカシさん（SCA＝無名の性的強迫症者の集まり）
- ◆LGBTとの共生をめざすNPO法人グッドエイジングエールズの立上げに関わり、現在はフリーで活動：金谷勇歩さん
- ◆知人がいない場所で初めての子育てを開始。現在はママたちによるグループでも活動：赤津優子さん（6歳と7歳の子どもをもつ母親、ママサークルに所属）

### ○プログラム内容

#### 1 企画意図の説明、参加者全員の「10秒自己紹介」

- ・参加者同士の繋がりのおかげとなるように。

#### 2 出演者パネルトーク

- ・彼が亡くなる間際、同性愛者ということで、相手の親御さんの理解を得られず、息を引き取るときにパートナーとして隣にいらなかった。自分たち以外でこんな痛みを受ける人がいてはいけない。自分にできることは何かと考えたとき、こうしてスピーカーとして伝えていきたいと思い、今日も登壇した。13人に1

人と言われる LGBT 等セクシャルマイノリティの人たちへの認知と理解を広げていきたい。

人が人に寄り添い愛するときに、年齢や性別など関係がないと、深く痛感した。LGBT 等セクシャルマイノリティの人たちのことを、一人の人として見て欲しい。

- 何かやりたいという当事者の方々の応援。

きっかけとしては、以前の同姓のパートナーが、同姓であるが故のさまざまな生活苦に直面して、「死のうとした」ことがあった。本人のせいとはとても思えない。自分も何かできないか。そういう思いからさまざまな当事者団体の取り組みに関わるようになった。

仕事とプライベートと、団体の活動と、とってもしんどくて苦しくなるときがある。そういうときはちょっと、「降りてもよい」のかなと思う。自分も今は、共感できたり、この人っていいな、この人のことを手伝いたいな、という感性を大切にしながら関わる取り組みを整理している。

例えば、出演者の「けんたろうさん」のような当事者の声を、どう社会にメッセージとして発信していくか、そういう手伝い。自分が「応援したい」と思える人たち、そういう人と人を繋ぐ「ハブ」として、繋がりの中で新しい価値観を生み出すことをしていきたい。

- なぜ、自分がグループに関わるようになったのか、団体としての見解ではなく私自身・一個人の発言として、できるだけ正直に話したい。

中学生の頃から、性的な強迫行為が少しずつ始まる。「人とは違うと思うと同時に、これが自分だという思い」に葛藤があり、誰にも話せなかった。孤立感が深まると、強迫行為が進むという悪循環。

アクションの一つとして「12 ステッププログラム」を使った、性的強迫症者の自助グループとの出会い。「治癒することは無いが、回復することはできる」ということをメッセージとして伝えてもらったことで、初めて希望をもつことができた。「解決策がある」という希望が自分をがらりと変えた。

- 父親を 13 歳の時に亡くした。今思うと、そこから「お母さんの面倒はあなたがみるのよ」という周りのプレッシャーが始まる。自分の夢を語りたい思春期に、「夢を絶たれた」という思いが当時あった。母は、今も父の死に苦しんでいて、そのことも、今もなお自分のプレッシャーになる。周りからは、母の介護、相続の問題など「あなたが考えるのよ」と迫られる。

「逃げるしかない」と思って、東京に来て、自死遺族に関わる取り組みをしている。自分自身、今も苦しいが、取り組みで出会う仲間を支えられてもいる。自死の取り組みの背景には、そうした生活課題があることを知って欲しい。それは、自死遺族に限らず、誰にとっても、いずれ向き合う課題なのだと知って欲しい。

- ・2人の子育てをしながら、仕事、サークル活動をやっている。今自分がやっていること。自分の興味の向くことに対して活動しているだけ、と思っている。それが自分自身に正直にあることだと思うし、そのことを大切にしたい。

今日のゲストの方々のお話を聞いていて、それぞれ立場や抱えているものも違ってもかもしれないが、皆さん「こころが向くこと」を大切に話していらっしゃることに、共感できるところがたくさんある。

自分も、子育てしながら、毎日迷いがある。自分の一言や行動が、この子の将来を左右する、日本の将来を左右するかもしれないと思う。

子どもを育てていると「普通でいなさい」という言葉で接しがちになる。無意識に親が区別してしまう。自分の子ども時代をふり返って、そうした言葉に傷ついた体験も思い出される。「他者との違いを受け入れる」そうした教育が、これから必要なのだと思える。だからこそ、今日のゲストの皆さんの話を聞いていても、「人ごととは思えない」と思える。

### 3 参加者どうし「メッセージ交換」

- ・出演者の話を聞いた感想、もしくはそれを聞いて感じた自分自身の暮らしについて、3つのグループに分かれて「メッセージ交換」をしました。  
グループごとにてできた話を、出演者も含めて全体で共有しました。

## ○成果と課題

「開催目的」に記した「分科会『成果物』のイメージ」と比べて考察してみます。

### 1 セルフヘルプグループ・当事者運動が、互いを知って繋がり合うことで、今後も広く支えあえる関係性を育むきっかけとする、という点について

最後30分のフリーでの情報交換会では熱心な情報交換が行われました。

「広く支えあえる関係性を育むきっかけ」としては大いに成果があったと思いますが、今後の課題として、やはり今回限りで終わらせないよう、連続企画等との連携が問われると思いました。

### 2 「共感できるメッセージ」づくりについて

出演者のテーマや関わりのスタンスなども多岐にわたったことから、「日々の暮らしのなかでの共感（違いを認め合うこと）」という点において、参加者一人ひとりが何らかの思いを持ち帰ることができたのではないかと思います。

一方で、リスクマネジメントの必要について、あらためて課題があがりました。話題提供者として出演される方は特に、大勢の前で自分をさらすこととなります。この分科会内だけをみると、誰かが傷つくことの無いよう、何度も打ち合わせを重ねて配慮してきたつもりでした。しかし、出演者の方が、分科会が終わった後の交流会で、他の参加者から不愉快な言動を受けるといった残念なことがありました。担当者として配慮の意識が足りなかったと反省しています。

しかし、「多様な『当事者性』を持ち合わせて参加する」ボランティアフォーラム参加者の特徴を考えると、たとえどのような配慮を行ったとしても、交流会においては予想もつかない、さまざまな価値観の軋轢（あつれき）が生じることは避けられないでしょう。むしろ、その「あつれき」をどのように市民のチカラとして「糧」に変えてゆけるかが、最も大きな課題だと思っています。その点、「不愉快な言動があった事実」を分科会企画者、出演者、ボランティアフォーラム実行委員会の皆で共有できたことは、それはそれで大切な成果だったと思います。

## ○ 担当者・記録

《担当》

後藤 浩二（スープの会）

田口 まゆ（NPO 法人 Serenity 代表）

杉村 郁雄（NPO 法人日本ファシリテーション協会）

圓藤 理江（東京ボランティア・市民活動センター）

森 玲子（東京ボランティア・市民活動センター）

安井 忍（東京ボランティア・市民活動センター）

《運営サポート》

川上 侑希子（東京大学大学院 教育学研究科）

《記録》

後藤 浩二（スープの会）